

子どもの「考えて書く力」の育成

ー生活科・総合的な学習の時間と国語科を連動させた授業の展開ー

学籍番号 159968
氏名 姫野 涼子
主指導教員 家近 早苗教授

1. 課題と目的

日本の子どもたちの書く力や考える力に課題があり、思考力・判断力・表現力の育成が求められている現在、A市では独自に定める「総合的な学力」向上に向け、児童の学力の分析や授業改善を行っている。実習校においても、書く力や思考力・判断力・表現力の育成に課題が見られる。

本研究の目的を、(1) 児童の「考えて書く力」を高めるための、生活科・総合的な学習の時間と国語科を連動させた授業を計画し実践すること、(2) 授業において児童の「考えて書く力」を高めるための効果的な授業の進めかたや教師のはたらきかけについて検討することとした。そのために、研究を第Ⅰ部と第Ⅱ部で構成した。

2. 研究方法

第Ⅰ部 「考えて書く力」を育成する授業モデルの作成と教師の授業力向上への手立て

【目的】 (1) 校内において教師の授業の進め方を改善する手立てとして、実習校の児童の実態に沿った「考えて書く力」を育成する授業の進め方について検討し、授業モデルを作成、提示する。

(2) 教師が授業モデルに則った授業を実現するための必要な授業改善への意欲を喚起する。

(3) 連動させたカリキュラムを作るために必要な授業計画の方法を伝達する。

【方法】 授業モデルを作成し2校の授業実態を比較、検討し、モデル授業を実施する。実習校教師対象に月2回放課後に30分から1時間程度の研修を実施し、参加した教師の感想を分析する。

【結果・考察】 授業モデルを作成し分析した結果、実習校では①児童自身の既存の経験を想起させる発問、②児童が学習活動を進めている時の教師の助言、③ふりかえりの時間の確保の3点が不十分であることが明らかになった。また、研究Ⅰで作成したモデル授業を実施した結果、「考えて書く力」を育成する授業が実際にどのような授業であるのか、見学に来た教師とイメージの共有をすることができた。また、児童が意欲的に取り組める言語活動を実施することで「書く」活動も充実させることが確認できた。指導案作成ツールを作成した結果、計画した授業における教師の働きかけのチェックシートとして活用できる可能性を見出すことができた。放課後に実習校対象の研修を実施し、感想を分析した結果、「これまでの実践への反省」「授業改善への意欲」「授業改善のための具体的なプラン」「獲得した知識の確認」の4つの概念に関する記述が得られ、教師集団に意欲の高まりが見られた。

第Ⅱ部 児童の「考えて書く力」を育成する校内の取組み

【目的】第Ⅰ部の成果を活用し、年間指導計画の作成と検討、授業の実施（指導案の作成、TTによる授業など）、児童の書く力の変化などについて検討する。

【方法】文部科学省（2008）の探究的な学習における児童の学習の姿と国語科で示される「考えて書く」力の育成に関わる学習方法を照らし合わせて整理し、学年担当教員と国語科と生活科・総合的な学習の時間を連動させた年間指導計画を検討、作成する。作成した年間指導計画に沿って、第Ⅰ部で作成した授業モデル取り入れた授業を担当教師と協同しながら授業実践を行う。児童が授業後に記述するふりかえりの量的・質的な変化を分析する。

【結果・考察】国語科と生活科・総合的な学習の時間を連動させた年間指導計画を検討した結果、須田ら（1982）がまとめた合科的研究のうちの3つの手法や関連的な指導を取り入れた年間指導計画を作成することができた。また、《TTとしての関わり》一覧表とB小っ子「考えて書く」6か条を作成し、報告者と各学年担当教師とで授業検討の場を設定し、連携がとりやすくなり、言語活動の充実を意識した授業づくりが可能になった。さらに、作成した年間指導計画に沿って授業実践を行った事で、授業モデルが示す教師の具体的な働きかけが明らかになり、「考えて書く力」を育成する授業についてのイメージを教員間で共有することができた。授業後の児童のふりかえりの分析によって、児童の「考えて書く力」が高まっていたことから、「考えて書く力」を育成する授業の実施に効果があったことが推測される。

3. 総合考察

児童の「考えて書く力」を高めるためには、①児童にとって身近に感じている場や人によってもたらされる児童の「再発見」に結びつくような体験的な学習活動を授業で実施すること、②児童の思考が学習活動の中でつながりやすくなるような合科的・関連的なカリキュラムを作成すること、③書く活動のみならず、ペアや集団の中で話したり聞いたりする中で、他者の意見を参考にしたり自分の考えと比較したりすることから促進される自己理解を促進するような言語活動を授業の中に取り入れることである。これら3つの要素がすべて必要であり、全体が連動して児童の「考えて書く力」を育成する環境ができあがっている。さらに、この3つの学習の場を整えるための働きかけを行うためには、①再発見に結びつく体験的な活動を実施する場では、児童の体験や経験と学びを結びつけるような発問を活動に応じて投げかける、②合科的・関連的なカリキュラムを作成する場では、学習内容の系統性や関連性の確認を行う、③自己理解を深める言語活動を取り入れる場では、指導目標の達成を促す助言を行う事で、より効果的に力を高めることができる事が明らかになった（図1）。

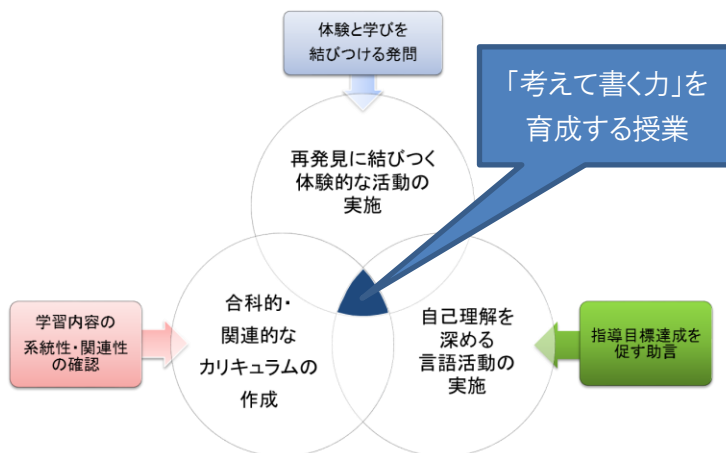


図1 児童の「考えて書く力」を育成する授業を構成するモデル